也、○略中比目といふは、今の常の飯なり、正月比目始といふも、常の飯を喰初る義也、強飯を喰べきを褻の義をなし初る故に別に斷るなりと云々、○略中又延喜大炊式云、凡供御稲米粟米春備日別送内膳司と見え、又云、供御料稲粟並用官田、其春得米一束二把五升、糯米亦同、一人日春三升、是等の文、當時平日供御も強飯たるべき歟、勿論褻には常の飯も獻ずる事に可有之相聞え候、稲米は常の米、粟米は餅米の事と相聞え候、文字の事には難當候へども、賦役令以下の取扱、如此分別いたし來ざる事に相見え申候、比目は和名抄糒糅の字を用候へば、粥と飯との間との説も面白存候、猶ほ考べし、

俊明案るに、高橋家の説いはれ有に似たり、されども少たらざる所有、まづ飯は今の常の飯にて粳也、これは蒸もたきほしにもすべきなり、○略中

強飯こはいひ、糒糅ひめ、粥かゆ、この三の物、そのわかちあれども、つねにはわきまふる事まれなり、まづ強飯は誰もしる所にて、今世に俗にもいへり、小豆を入しをば赤飯と云、京江戸ともに音語を用ゐ、あづき飯といへば、粳にて焚ほしにせし常のめし也、糒糅をば是をひめと云、此事知人まれ也、和名抄に糒糅は和名比女といへり、或説云、非米非粥之義也と見ゆれば、米と粥との間といふ意にて、今常に用るめし也、但し是は強飯と比女とは強弱のたがひのみにして、焚乾も蒸たるもその事は同じ、○略中粳うるし糯もちは各その品によりて用ゐてこれにかゝはらず、粥は是もまた二ツ有て、かたがゆ、○略註ともに饘字をよみ、○略中饘は卽ち又比目と同物にして、今云焚乾のめし也、たゞわかちていはゞ、比女は蒸たるめし、饘はたきほしのめし也、この三のわかち、甚だ入くみて心得たがふこと多し、○略下

〔飯粥考〕強飯

按に糒糅よりも強ければ強飯の名あり、饗飯に水を沃て再三蒸たる諸炊の飯也、漢字は饙に